「ままが、ずっといきるために」

桃瀬めぐみ　（30 代）

「ままもしむの？」

五歳の娘の口から出た「しむ」が、最初は何のことだか分からなかった。「死ぬ」だと気づいた時には、彼女の目がもう潤んでいた。

その日、テレビの中で一頭のシマウマが横たわっていた。ライオンの群れが去った後の、静かな死。娘は画面を指さして「このシマウマ、ねてるの？」と聞いた。私は一瞬迷ったが、生き物はみんな、いつか必ず死ぬのだと答えた。冷蔵庫の牛乳に書いてある賞味期限を説明するような、なんでもない口調で。もちろん脅すつもりはなかったし、むしろできるだけ軽く済ませたかった。

けれど娘は大きな目をさらに大きく見開き、しばらく黙り込んだ。それから少し間を置いて「ままもしむの？」と聞いてきたのだった。

それ以来、娘は毎日手紙をくれるようになった。ある日は広告の裏に、ある日はハート型の折り紙に、またある日は塗り絵の余白に。そこには拙いひらがなで、決まって「まだいすき」と書かれている。勢い余って「ま」の横棒が多かったり、つけなくていい文字にまで濁点がトッピングされていたりすることもある。「まだいず」と書かれていた時は、思わず笑ってしまった。けれど、不格好で一生懸命な筆跡からは、彼女の必死さが痛いほど伝わってきた。文字ひとつひとつが、まるで祈りのようにも見えた。

今までの人生で、これほどストレートに「死なないで」と懇願されたことがあっただろうか。親からの愛も含めて、これまでの人間関係はもっと穏やかで、お互いに踏み込みすぎないものだった。私の存在をここまで真っすぐに、絶対的なものとして必要とされるのは、初めてのことに違いなかった。

「ねえ、どうして毎日お手紙くれるの？」

ある夜、娘に尋ねてみた。すると娘は私の腕に小さな頭を擦りつけながら、大真面目な声で言った。

「ままが、ずっといきるために」

不意を突かれて、言葉が詰まった。健康診断の数値だって悪くないし、明日どうにかなる予定もない。けれど、そこまで真っすぐな目で私の命を必要とされると、何が何でもしぶとく生き延びてやらねばという妙なアドレナリンが湧いてきた。

人間はいつか必ず死ぬ。どんなに愛し合っている家族でも、順番にこの世界からいなくなる。この部屋の風景も、少しずつ形を変えていくだろう。それでも娘の手紙を眺めていると、そんな終わりの日のことなんて、なんだかどうでもよくなってしまう。今この瞬間に、私の手の中にある愛の重さと温かさが、あまりにも確かで圧倒的すぎるからだ。

今日もテーブルの上には、一通の小さな手紙がちょこんと置かれている。私はそれを、冷蔵庫のいちばん目立つ場所に貼り付けた。期限のない愛は、どう扱えばいいのかまだよくわからない。